第６分科会

「ケア」に直面する学生を支えるために

報告者

田中 智子 氏　佛教大学 社会福祉学部 教授

河西 優 氏　立命館大学 衣笠総合研究機構
人間科学研究所 補助研究員
／Young Carers Action Research Project 発起人

鈴木 美佳子 氏　大谷大学 学生支援部 学生支援課（保健室）
／障がい学生支援チーム（横断型）チームリーダー

コーディネーター

中野 加奈子 氏　大谷大学 社会学部 准教授

〈第６分科会〉

「ケア」に直面する学生を支えるために

コーディネーター
大谷大学 社会学部 准教授　　中野　加奈子

○本分科会のねらい

コロナ禍でエッセンシャルワーカーへ着目が集まったが、私たちの暮らしには「ケア」は不可欠なものである。学生本人の学びの場では、障がいのある学生や学生生活に悩みを抱える学生へのケアが求められる。また、学生の中には家族や他者のケアを担う役割として生活し、大学生活上の困難に直面する者もいる。

大学は教育機関として学生の学習を指導する役割を担うが、今日では、本来的な役割である教育指導を進めるためにも、学内の教職員との連携の中で「ケア」を必要としていたり、「ケア」の担い手として奮闘する学生を指導していくと同時に、学外の関係機関と協力をしながら学生のサポートを展開する必要がある。

本分科会では「大学生とケア」に焦点を当て、学生が「ケア」についてどのような問題に直面しているのか、また、大学は学生と「ケア」について、どのように取り組む必要があるのか、当事者、教員、大学職員の三者から報告し、議論を深めた。

○報告の概要

第一報告は、河西　優氏（立命館大学衣笠総合研究機構人間科学研究所　補助研究員 / Young Carers Action Research Project　発起人）から、「当事者の視点からみえる大学生ケアラーの実態」と題して報告があった。近年、「ヤングケアラー」への社会的注目が高まっており、大学生にも家族のケアを担う当事者が多く存在する。政府は、2024 年にヤングケアラー支援を法制化する指針を示しており、18 歳から 30 代までの若者ケアラーも支援対象に含む。18 歳未満のヤングケアラーを中心にした支援が行われている今、若者ケアラーに対する支援を考えることは急務である。本報告では、若者ケアラーのなかでも特に大学生ケアラーに焦点を当て、YCARP を通じてみえてきた当事者の声が紹介された。

続いて第二報告は、田中　智子氏（佛教大学社会福祉学部　教授）から「ヤングケアラーと社会福祉職の専門職養成（大学教員の立場から）」と題して報告があった。田中氏からは、大学教育の場でヤングケアラーは潜在化していることが多いものの、学生からの自己申告がなければ、その存在にも気づくことはできない、という指摘があった。その一方で、その事実を知り得たときに、大学教育という枠組みの中でどのように対応していけば良いのか。個別の家庭事情と、全体としてのカリキュラムの進行、ゼミなどの集団活動のズレなど、どのように配慮すれば良いか判断に悩む場面も多い。また田中氏は社会福祉士の養成に携わっており、「当事者」としての経験が専門職養成の場ではストレングスと課題の両方につながる側面を持つことなどを述べた。

第三報告は、鈴木　美佳子　氏（大谷大学　学生支援部（保健室）障がい学生支援チーム（横断型）チームリーダー）から「小規模私立大学の障がい学生支援体制―大谷大学における横断型チームの実践―」と題して報告があった。大谷大学では小規模私立大学の特性を活かし、障がい学生支援「ケア」に関する体制として、障がい学生を組織的に支援＝「ケア」することはもとより、教職員の「ケア」にもつながる支援体制を目指して、2022 年 10 月より障がい学生支援（横断型チーム）を発足している。このような支援体制を創設するに至った経緯や、具体的な支援体制の説明があった。その上で、教職員が障がいのある学生一人ひとりの個別性を理解した上で、支援の押し売りにならないよう、学生との対話も大切にしながら支援にあたっているという説明があった。

※報告の詳細は、この後の添付資料をご参照いただきたい。

＜タイムスケジュール＞
10:00　趣旨説明　　中野　加奈子　氏（大谷大学社会学部　准教授）

10:05　講演 1「当事者の視点からみえる大学生ケアラーの実態」

河西　優氏（立命館大学衣笠総合研究機構人間科学研究所　補助研究員／Young Carers Action Research Project　発起人）

10:30　講演 2「ヤングケアラーと社会福祉職の専門職養成（大学教員の立場から）」
田中　智子氏（佛教大学社会福祉学部　教授）

10:55　講演 3
「小規模私立大学の障がい学生支援体制―大谷大学における横断型チームの実践―」
鈴木　美佳子氏（大谷大学　学生支援部（保健室）障がい学生支援チーム（横断型）チームリーダー）

11:30　休憩（質問、コメントの受け入れ）

11:40　ディスカッション・質疑応答　　司会　中野　加奈子（大谷大学社会学部　准教授）

○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

以上の報告を受けて、質疑応答。ディスカッションの時間では、参加者の質問と、登壇者間での意見交換を行なった。

参加者からの質問は、zoom のチャット機能を利用して受け付けた。

まず参加者より、「合理的配慮申請の情報は、すべてチーム内で共有されるか？また、学科の教員等にも共有されるか？」という質問があり、鈴木氏より、学生と相談の上で配慮内容をまとめた文書をチーム内はもちろん授業担当教員へ配布していると回答があった。また、田中氏に対しては「「当事者」としての経験が専門職養成の場ではストレングスと課題の両方につながる側面を持つ」ことについての解説を求める質問があった。これに対しては、田中氏より、当事者性により利用者理解や共感が深まることや、その一方で相対化できずに苦しむ場面も生まれてしまうことなどの説明があった。

その後、報告者からそれぞれの報告に対する意見、感想を述べた。田中氏からは、イギリスの大学でのヤングケアラー対策について河西氏への質問があった。河西氏からは、イギリスでは入学時の調書にヤングケアラーかどうかチェック項目があるなど、学生のケア状況を把握しやすい工夫がなされていることや、しかしながら教育や支援には課題があることなどが説明された。

また、報告者の意見交換の中では、河西氏の報告では、ケアラーである学生たちが学生相談室などの学生支援窓口に相談しづらい状況があることが指摘されたが、鈴木氏の報告にあるような大学での取り組みにより相談の機会を増やすことや情報共有の仕組みを構築することで、相談しやすい雰囲気を作り出していくことが可能ではないか、という意見も出た。また、ケアに直面し生活上の困難を抱える状況にある人々は、学生のみならず教職員の中にも存在している。したがって学生、教職員でケアについて語り合い、支え合うような場づくり、支援体制の構築が必要ではないか、という意見もあった。

今回の分科会を通して、ケアに直面する学生に対する大学での教育・支援のあり方ついて改めて考える機会となった。特に、コーディネーターとしては、コロナ禍を経験し学生同士や学生と教職員間の関係性が希薄化してきたことを踏まえ、ケアをキーワードにして大学内でのコミュニティの再構築を検討していく可能性があるのではないか、と主張したい。

時間の関係で、登壇者と参加者が議論を深めるというよりは、現状把握にとどまったかもしれないが、今回を機に、各大学でケアについて議論が深まることを願う。

最後に、登壇されたみなさま、参加されたみなさまに感謝申し上げたい。またFDフォーラムの開催にむけてご尽力いただいた事務局のみなさまにも深く感謝したい。

河西 優　　立命館大学 衣笠総合研究機構 人間科学研究所 補助研究員
/ Young Carers Action Research Project 発起人

スライド1

当事者の視点からみえる大学生ケアラーの実態

立命館大学 衣笠総合研究機構人間科学研究所 補助研究員
子ども・若者ケアラーの声を届けようプロジェクト（YCARP）発起人
河西優
（1998yu0222kasai@gmail.com）

スライド2

自己紹介

◆大阪市出身、京都市在住の26歳

◆立命館大学人間科学研究所にてプロジェクトの専属研究員として勤務

◆小学校高学年の頃より統合失調症の母親のケアをしてきたケアラー当事者

スライド3

子ども・若者ケアラーの声を届けようプロジェクト（2021年9月～）

○立命館大学産業社会学部の斎藤真緒教授、当事者6名を発起人として始動した当事者参画型アクションリサーチプロジェクト

○月1回の定例ミーティングやケアラーのための社会資源の開発に向けた取り組みを行う（https://y-carp.wixsite.com/my-site）

スライド4

1. 日本における「ヤングケアラー」をめぐる動向

スライド5

一般的な定義

「ヤングケアラー」とは
「家族のケアを担う子ども・若者」のこと

日本ケアラー連盟によると、
●ヤングケアラー
「家族にケアを要する人がいる場合に、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを行っている、18歳未満の子どものこと」

●若者ケアラー
「18歳～おおむね30歳代までのケアラー」
（日本ケアラー連盟・ヤングケアラープロジェクト（aqua.ac））

スライド6

「ヤングケアラー」

・家事
・幼いきょうだいの世話
・障害や病気のあるきょうだいの世話や見守り
・声かけや気遣い
・家族のための通訳
・経済的なサポート

https://youngcarerpj.jimdofree.com/

スライド7

「ヤングケアラー」

・依存症のある家族への対応
・精神疾患など、慢性的な病気の家族の看病
・入浴やトイレ介助など、身の回りの世話

https://youngcarerpj.jimdofree.com/

スライド8

社会的背景

・「家族」をセーフティネットとした日本型福祉
・在宅福祉の充実という国の方針
・サービスによってケアを代替したり、親族や地域のネットワークによってサポートを受けたりすることのハードル
・家族に第一義的責任が課されるサービス設計の限界や社会規範

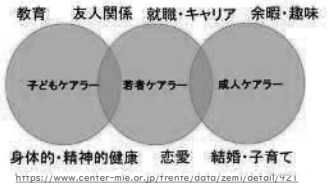
・時間的にも人員的にも余裕をなくす家庭
世帯人数の減少・ひとり親や共働き家庭の増加を含めた家族の多様化

→必然的に発生するケアの分担において、稼得・ケアの担い手が多様化している（男性、高齢者、子ども・若者…）

スライド9

ケアによる影響

・ケアによる孤立が常態化・長期化すると、人生レベルでその人のウェルビーイングが損なわれる可能性がある。



https://www.center-mie.or.jp/trente/data/zemi/detail/921

→18歳未満の「ヤングケアラー」でない、「子ども・若者ケアラー」という視点

スライド10

可視化されてきた「ヤングケアラー」

●政府によるヤングケアラー調査（三菱UFJリサーチ・コンサルティング 2021）
https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2021/04/koukai_210412_7.pdf

家族の世話をしている中学2年生5.7%、全日制高校2年生4.1%
⇒中学生の17人に1人、高校生のおよそ24人に1人が「ヤングケアラー」
⇒定時制は12人に1人、通信制は9人に1人

●政府による若者ケアラー調査（株式会社日本総合研究所 2022）
https://www.jri.co.jp/MediaLibrary/file/column/opinion/detail/2021_13332.pdf

家族の世話をしている大学3年生 「現在いる」6.2%
⇒大学3年生の16人に1人が「若者ケアラー」

スライド11

社会問題化と支援に向けた動き

●「ヤングケアラー」による殺人事件
・神戸市須磨区（2019年10月）
当時社会人1年目の女性が、同居する認知症の祖母を殺害した事件。
2020年9月の裁判で「介護で寝られず、限界だった」と語る。
https://mainichi.jp/articles/20201028/k00/00m/040/074000c

・滋賀県大津市（2021年8月）
17歳の兄が面倒をみていた6歳の妹を殺害した事件。
シングルで子育てをしていた母親は、遠方での仕事で家に帰らない日が多くなっていた。裁判では、きょうだいがネグレクト状態に置かれていたことや児相の責任が問われた。
https://www3.nhk.or.jp/news/html/20211004/k10013285481000.html

スライド12

●支援に向けた動き

2020年～ ケアラー支援条例
http://www.rilg.or.jp/htdocs/img/reiki/023_carersupport.htm

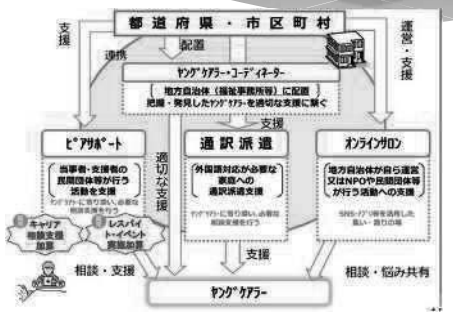
2021年～ 厚生労働省×文部科学省PTチーム発足

2023年～ こども家庭庁による施策開始
- 相談窓口の開設
- 家事、育児支援
- 外国語通訳派遣事業
- オンラインサロン等でのピアサポート

2024年 若者ケアラー含め支援法制化へ

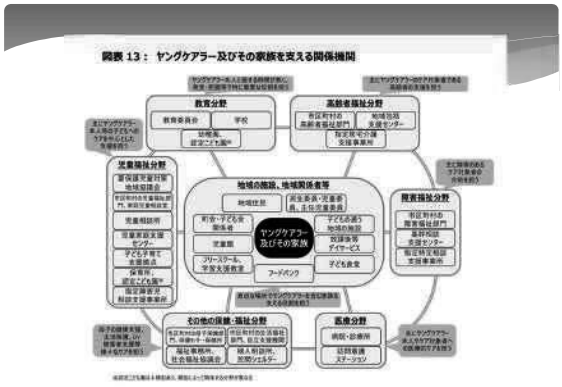
https://www.mhlw.go.jp/young-carer/

スライド13



https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/a176de99-390e-4065-a7fb-fe569ab2450c/82574c78/20231226_policies_jidougyakutai_20.pdf

スライド14



https://www2.deloitte.com/jp/ja/pages/life-sciences-and-healthcare/articles/hc/hc-young-carer.html

スライド15

2. 若者ケアラーの実態

スライド16

大学生調査（株式会社日本総合研究所 2022）
https://www.jri.co.jp/MediaLibrary/file/column/opinion/detail/2021_13332.pdf

世話を始めた時期
「大学入学以降」35.9%、「高校生から」22.4%、「中学生から」13.0%

世話をしていることで、大学進学の際に苦労したこと・影響
「学費等の制約や経済的な不安があった」26.7%
「受験勉強をする時間が取れなかった」21.6%

家族の世話をしている場合に割合が高い項目
健康状態が「あまりよくない」、「よくない」
欠席、遅刻・早退が「たまにある」、「ある」

世話をすることで感じるきつさ
「精神的にきつい」42.4%、「特にきつさはかんじていない」41.8%

世話をしていることで、やりたかったができなかったこと、あきらめたこと
「自分の時間が取れなかった」32.2%
「睡眠が十分にとれなかった」24.4%

スライド17

大学生調査（株式会社日本総合研究所 2022）
https://www.jri.co.jp/MediaLibrary/file/column/opinion/detail/2021_13332.pdf

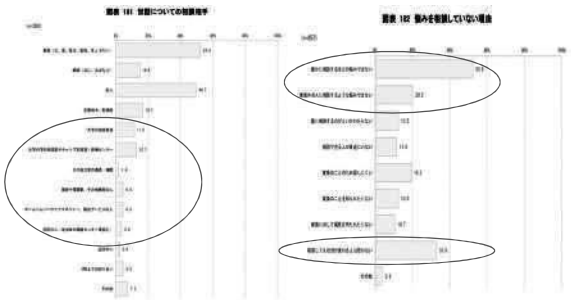
世話をしている（していた）ことで今後不安なこと、やりたいけどできなさそうなこと
「自分の時間が取れない」20.1%
「一人暮らしができるか不安がある」15.9%
「恋愛・結婚に対する不安がある」14.4%

世話をしていることで生ずる就職に関する不安
「正社員として就職できるか不安がある」13.9%
「通勤できる地域が限られる」13.4%

世話をする理由
「自分がお世話をしないと家族が困るため」46.9%
「ほかにお世話をできる人がいないため」27.0%
「自分がお世話したいと思うため」25.2%

スライド18

世話について相談した経験
「ある」33.4%、「ない」66.6%



第6分科会

スライド19

YCARPで出会った若者ケアラーの声

ケアと人生設計をめぐる葛藤
- ケアと距離をとるために一人暮らしをしたいけれどハードルが高い。
- 金銭やメンタル上の問題で勉強についていけなくなったり、大学にいけなくなったりする。
- 周りの悩みと自分の悩みのギャップを感じる（友達・恋愛関係）
- 就活で自分の家のことを話すか迷ったり、どこで働くか迷ったりする。

潜在化するケアラー
- 休学、退学、遅刻、欠席、課題の遅れなどがあっても「不真面目な学生」とみなされたり、事務的に処理されたりする。
- 大学＝家とは違う世界として「普通」にふるまうため、「困難な学生」とは思われない。
- クラス単位ではないので把握しきれない
- 保健センターや学生相談室は取り扱う問題のイメージが異なる。
- キャリアセンターは自分のことに時間・気力を使える前提の就活に則っている。

社会とつながるきっかけとしての大学
- ゼミなど少人数のクラスで気づかれるケースがある。
- 授業や研究を通した知識の獲得や様々な人とのかかわりの中で自分の経験を相対化すること。

スライド20

ご清聴ありがとうございました

FD フォーラム　第６分科会（240224）

ケアを担う学生と社会福祉職の専門職養成

田中智子（佛教大学・社会福祉学部）

本報告の内容

〇これまで出会った印象的な学生との出会いから感じている課題
〇社会福祉専門職養成の課題
〇専門職養成・大学教育での対応・工夫

気になる学生：A さん・B さん

ケアを担っている（と思われる）学生に感じる課題

社会福祉専門職養成の課題
①ケアラーアイデンティティの葛藤

②実習などの学外での学びについて／向けては、学内での配慮と同じように考えることができない

③配慮とは何か？

専門職養成・大学教育での対応・工夫

①授業内容（現代家族論、障害児者福祉論）にケアに関わること、ケアを取り巻く社会状況について考える機会を盛り込む

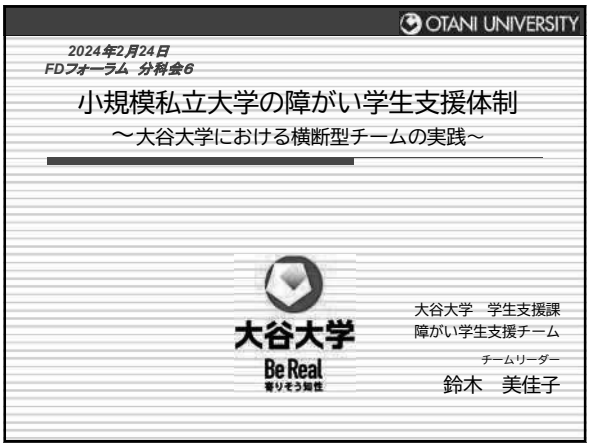
:「現代家族の特徴を社会構造と結び付けて把握し、そのうえでライフサイクルを通じてどのような生活問題が生じるのかについて実践的に理解を深めていく。その際、もっとも濃密で長期にわたるケアが必要と考えられる障害者家族を対象に「ケア」の視点からとらえ直すことで、家族内部に生じている不平等にも目を向け、社会福祉の課題について考察するための視点と方法を身につける」（現代家族論シラバスより）

②多様な当事者・支援者との出会い

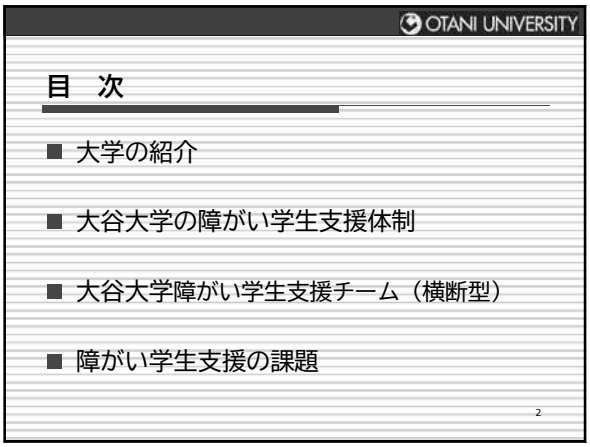
③きょうだい会の設立

鈴木 美佳子　　大谷大学 学生支援部 学生支援課（保健室）
／ 障がい学生支援チーム（横断型）チームリーダー

スライド1

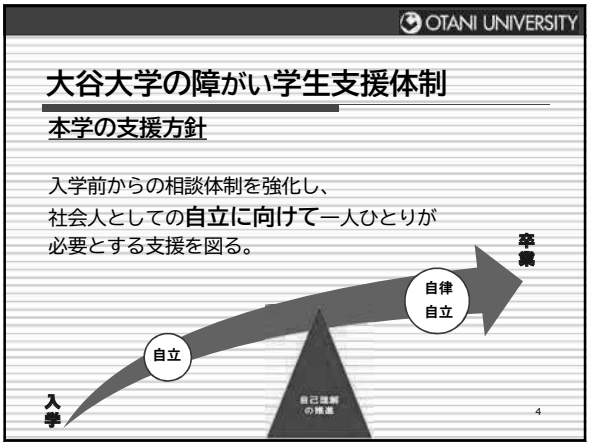


スライド2

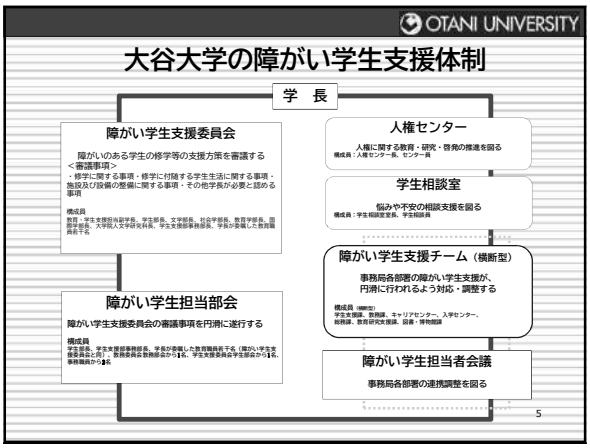


スライド3

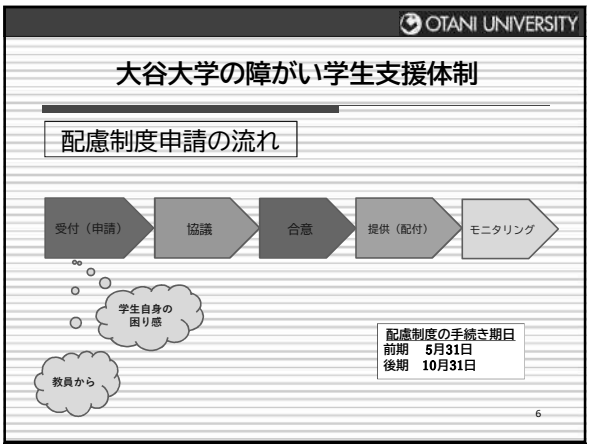
スライド4



スライド5



スライド6



スライド7

OTANI UNIVERSITY

障がい学生支援チーム(横断型)

2021年教員対象アンケート実施
・合理的配慮の理解不足
・相談場所が不明瞭
・情報共有の機会の確保

↓

2022年10月
障がい学生支援チーム（横断型）発足
【チーム構成】
各部署から1名以上（チーム発令としては各部署1名）

7

スライド8

OTANI UNIVERSITY

障がい学生支援チーム（横断型）

■毎月1回　担当者会議で情報共有
■日常は、「グループウェア」などで随時情報共有

適宜面談実施
チーム共同で面談を行う場合も頻繁にある。
例：キャリアセンターの面談に教務課、学生支援課が同席

8

スライド9

OTANI UNIVERSITY

障がい学生支援チーム（横断型）

横断型チームのメリットとして・・・

■担当者が明確
■リスクマネージメント効果
■多角的な視点で関わることができる

9

スライド10

OTANI UNIVERSITY

障がい学生支援の課題

■要配慮学生、グレーゾーン学生の増加＝事前的改善措置

■課題の周知
・ホームページ等外部へのアナウンスリソースの整備
＝情報アクセシビリティ向上

■教職員の研修会参加機会の確保
・合理的配慮等、障がい学生支援に関する正しい理解

■自己理解とセルフアドボカシーの必要性と移行支援強化

10